

平成 23 年
5 月 31 日

病害虫発生予報 6 月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

晴れ間を利用し，確実に防除を実施しましょう！

< 目 次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水稲：いもち病（葉いもち）	1
水稲：イネドロオイムシ	1
ナシ：黒星病	2
ナシ：ナシヒメシンクイ	2
果樹共通：カメムシ類	3
半促成ピーマン：うどんこ病	4
夏ネギ：べと病	4

【その他の病害虫】	6
水稲，ナシ，ブドウ，半促成ピーマン，夏ネギ	

II. 今月の気象予報

「病害虫情報」の名称が「病害虫速報」に変わります。

昨年度まで病害虫の発生状況に応じて「病害虫情報」として臨時情報を発表していましたが、今年度からは「病害虫速報」と名称を変更して、的確な情報をより迅速に発表しますのでよろしくお願いいたします。

なお、「病害虫発生予察警報」や「病害虫発生予察注意報」及び、「病害虫発生予察特殊報」は例年同様の名称で発表します。

水田において農薬を使用するときは、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間を1週間程度とすること。

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel : 029-227-2445

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/>

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. いもち病（葉いもち）

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
平年並	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、置苗でのいもち病の発生は、例年どおり認められない。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想され、発生をやや助長する条件である。

発生好適条件：気温 20～25℃で、弱い雨や霧などが続いてイネの葉が長時間ぬれるような条件のとき。一般的に6月の高温多湿、7～8月の低温多雨は発生を助長する。

[防除上注意すべき事項]

- ① 置苗はいもち病の発生源となるため、速やかに本田から持ち出して埋める等処分する。
- ② 常発地で、育苗箱施用剤を使用していない水田では、特に発生に注意する。
- ③ 例年6月下旬から発生するので、粒剤で本田防除する場合には適期を逃さずに防除する。
- ④ 粒剤の施用時期と中干しの時期が重なる場合には、中干し後に必ず湛水状態にしてから粒剤を散布する。
- ⑤ 中干し等の栽培管理を徹底し、イネの健全育成に努める。
- ⑥ いもち病の発生した苗を移植すると被害が大きくなるので、震災の影響で田植えが遅れている場合は育苗期の発生に注意する。

2. イネドロオイムシ

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
平年並	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、越冬成虫の発生量及びイネへの産卵数は平年より多い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想され、発生をやや助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 育苗箱施用剤を使用していない水田では、曇雨天が続く場合は注意が必要である。また、霧が発生しやすい地域等では発生が多い傾向がある。
- ② 長期に曇雨天が続く場合は、育苗箱施用剤を使用しているも薬剤の種類によっては、6月中旬以降に発生が多くなることもある。
- ③ 例年の発生推移としては、幼虫が6月上旬頃から発生し、6月下旬に被害が最も多くなる。7月上旬には終息するが、幼虫の発生が多く、食害が目立つ場合は防除を行う。
- ④ 震災の影響で田植えが遅れ、イネが小さいうちに加害を受けた場合、被害が大きくなる可能性があるため、発生に特に注意する。

ナ シ

1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、発病葉率は平年並、発病果率は平年よりやや高い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想され、発生をやや助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病した果そう基部、葉及び果実は二次伝染源となるため、見つけ次第除去し、土中深く埋めるなど、適切に処分する。
- ② 薬剤散布は雨の合間をみて行う等、参考防除例を参考に間隔が空かないように注意し、予防に努める。
- ③ 発病が確認された圃場では、発病部位を除去した後に薬剤防除を行う。
- ④ 薬剤散布は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部など、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

2. ナシヒメシンクイ（第一世代成虫）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、県予察圃（笠間市）に設置したフェロモントラップへの誘殺数は多発した平成18年より多く、5月第5半旬までの総誘殺数は過去11年中1位である。
- ② フェロモントラップへの5月第5半旬までの総誘殺数は、かすみがうら市で過去5年中1位、小美玉市で過去8年中4位である。
- ③ 5月下旬現在、被害果の発生は例年どおり認められない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 今後、次世代成虫（第一世代）が発生するため、情報を参考に適期防除に努める。
- ② 薬剤散布は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部など、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

防除所レポート [積算気温によるナシヒメシンクイ第一世代の発生予測]

- ① 県予察圃（笠間市）に設置したフェロモントラップへのナシヒメシンクイ越冬世代の誘殺数は、4月第3半旬に最高に達した（図）。
- ② ナシヒメシンクイの発育に有効な気温の積算値から、次世代（第一世代）の誘殺数が最高に達する時期を予測すると、**6月18日頃**になると予想される。
- ③ ナシヒメシンクイ第二世代幼虫を対象とした防除適期は、第一世代の誘殺数が最高に達した日から7～9日後なので、6月下旬頃である。
- ④ 発生時期の予測は5月30日現在であるので、今後の情報を引き続き参考にする。

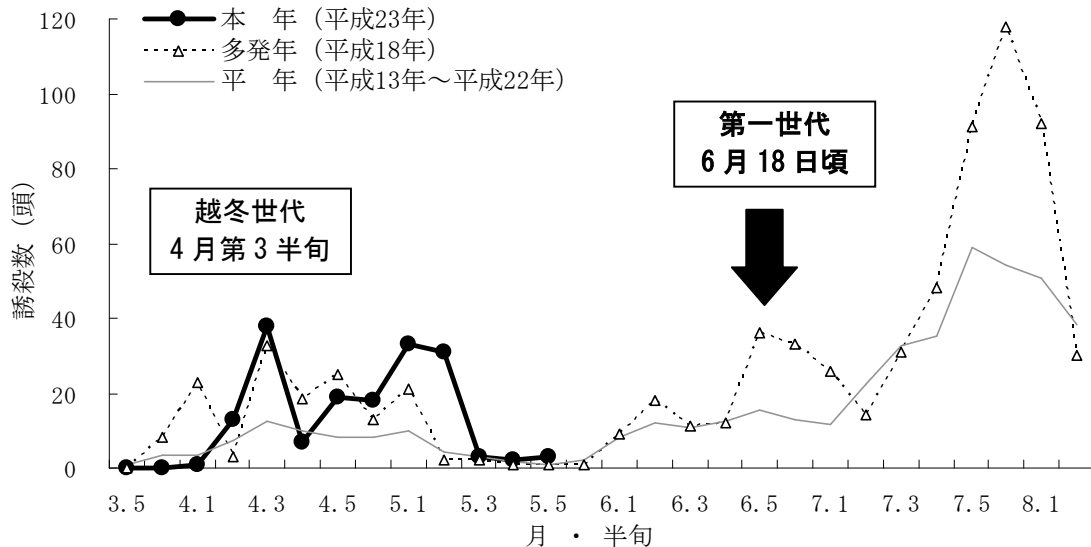


図 フェロモントラップによるナシヒメシンクイ雄成虫の誘殺数の推移（笠間市）

果樹共通

1. カメモムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	チャバネアオカメモムシ： 平年並～やや少ない	県下全域
	クサギカメモムシ：多い	

[予報の根拠]

- ① 本年 2 月の山林での越冬量調査におけるチャバネアオカメモムシの越冬成虫数は平年よりやや少なく、クサギカメモムシの越冬成虫数は過去 4 年と比較して最も多い。
- ② 5 月下旬現在、果樹園に設置した予察灯（かすみがうら市）へのチャバネアオカメモムシの誘殺数は平年よりやや少なく、飛来開始時期は平年並である。
- ③ 5 月下旬現在、サクラのたたき落とし調査では、チャバネアオカメモムシの発生量は平年並で、クサギカメモムシの発生量は平年より多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 夜温が高いと活動が盛んになり、果樹園へも飛来するので、注意する。果樹園内でカメモムシ類を確認した場合には、活動が鈍い早朝に薬剤防除を行う。
- ② 多目的防災網（6 mm目及び9 mmクロス目以下）を張ると防除対策として有効である。

半促成ピーマン

1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在，発病度，発生地点率ともに平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため，発生が少ないうちに防除を徹底する。
- ② 罹病部は新たな伝染源となるため，病斑の多い葉は取り除き，ハウス外に持ち出して処分する。
- ③ 薬剤は，薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう，十分な量で丁寧に散布する。また，薬剤耐性菌の出現を防ぐため，系統の異なる薬剤を散布する。

夏ネギ

1. ベと病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在，発病度，発生地点率ともに平年並である。
- ② 気象予報によると，向こう1か月の降水量は平年並か多く，日照時間は平年並か少ないと予想され，発生をやや助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

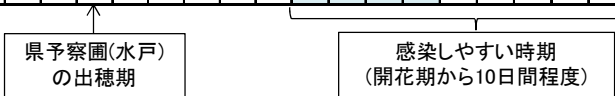
- ① 前年発生が多く見られた圃場は発病状況に注意し，発病が見られたらただちに防除を行う。
- ② 発病初期の防除に重点をおき，その後の発病状況に応じて追加防除を行う。
- ③ 薬剤散布は展着剤を加用し丁寧に散布する。また，薬剤を散布する際は，収穫前日数に十分注意する。

[現在の状況]

- ① 赤かび病に感染しやすい時期は開花期から 10 日間程度であるが、特に開花期(出穂後約 7~10 日)に子とう胞子飛散好適日が多いと本病の発生が増加する傾向がある。
- ② 今年は、小麦の出穂~開花期以降、本病の感染・発病に適した条件が続いた(表)。
- ③ 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年並、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている。
- ④ 防除所の巡回調査における 5 月下旬の小麦赤かび病の発生量は「平年並」であったが、今後の多湿な気象条件下で感染が進む恐れがあるため、以下を参考に対策を実施する。

表 赤かび病の子とう胞子飛散好適条件の出現状況(水戸市)

日付	5月																												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
子とう胞子飛散好適日	●	●		●	●		●	●		●	●	●	●	●			●	●				●	●	●		●		●	●
日最低気温 10℃以上	○	○		○	○		○	○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
日最高気温 15℃以上	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
湿度80%以上							○			○	○	○					○					○		○				○	○
降雨日とその翌日	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○		○	○				○	○	○	○			○	○



- : 子とう胞子の飛散好適日
- : 子とう胞子の飛散好適条件(日最低気温 10℃以上, 日最高気温 15℃以上で, 湿度 80% 以上か降雨日とその翌日)

※表中の色付け部分は農業研究所県予察圃(水戸市)の開花期を示す(播種日:11月9日)。
 ※圃場により出穂期は異なるので、各圃場に合わせて表を参照する。

[収穫期以降の対策]

- ① 収穫が遅れると、被害粒から健全粒へと感染が広がる恐れがあるため、適期収穫に努める。また、圃場内で倒伏した部分は多湿条件となり、感染が広がっている恐れがあるため、その部分は刈り分けて処分する。
- ② 含水率の高い麦を収穫した場合、袋の中で本菌が蔓延することがあるので、収穫後は時間をおかずに適切な乾燥・調製を行う。
- ③ グレーダーによる粒厚選別 (2.4mm 以上) 等は被害粒の除去に有効である。
- ④ 被害残渣やイネ科雑草は翌年の伝染源となるので、土壌中にすき込んで腐敗させる。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
水稲	黄化萎縮病	—	移植後 10～50 日の間に冠水すると発生の恐れがある。常発地で冠水した場合には、防除を行う。田植えが遅くなり、イネが小さい水田では冠水しやすいので特に注意する。
	イネミズゾウムシ	発生量: 平年並	5 月下旬現在, 平年並の発生である。イネの初期生育が遅い水田, 育苗箱施用剤を使用していない水田では発生に注意する。
	ニカメイガ	発生量: 平年並 ～やや多い	5 月下旬現在, フェロモントラップにおける誘殺数は平年並～やや多い。本虫の発生は, 近年, 局地的に増加しているので注意する。
ナシ	アブラムシ類	発生量: 平年並	5 月下旬現在, 平年並の発生である。
ブドウ	灰色かび病	発生量: 平年並	5 月下旬現在, 平年並の発生である。
	べと病	発生量: 平年並	5 月下旬現在, 平年並の発生である。
ピーマン 半促成	アザミウマ類	発生量: やや多い	5 月下旬現在, 平年よりやや多い発生である。
夏ネギ	ネギアザミウマ	発生量: やや多い	5 月下旬現在, 平年よりやや多い発生である。
	ネギハモグリバエ	発生量: やや多い	5 月下旬現在, 平年よりやや多い発生である。

施設野菜の栽培終了後の管理について

コナジラミ類, アブラムシ類は, 各種ウイルス病を媒介するのでハウス外への飛び出しや, 次作への持ち越しを防止するため, 株元を切断し 1～2 週間程度ハウスを密閉する蒸し込みを行う。

蒸し込み終了後は, 作物残渣のハウス外への持ち出しを徹底し, 罹病残渣からの各種病害の伝染を防止する。

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 5月28日から6月27日)

気象庁(5月27日 発表)

<向こう1か月の気温, 降水量, 日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	30	40	30
	降水量	関東甲信全域	20	40	40
	日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

<1週目の予報> 5月28日(土曜日)から6月3日(金曜日)

気温 関東甲信地方 低い確率60%

<2週目の予報> 6月4日(土曜日)から6月10日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率40%

<3週目から4週目の予報> 6月11日(土曜日)から6月24日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し, 適用作物, 使用方法, 注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には, 周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず, 良く洗浄しましょう。